
黒翼の魔法使い

Lily

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒翼の魔法使い

【Nコード】

N9214Z

【作者名】

Lily

【あらすじ】

とある城で働く魔法使いは、残業続きの毎日に嫌気がさし、転職を希望する。鬼畜の宰相様に無理やり転職させられた仕事は、勇者の仲間の魔法使いになることだった。しかし、魔法を使えるはずの勇者に魔法の才能はない上に、魔法を使えるように見せなければならぬ。それに、本人はそのことを知らない。やけに魔法を使いたがる勇者のために、陰で必死に魔法を使う魔法使いの仕事が始まった。

【プロローグ】（前書き）

三作目です。

完結できるように頑張りたいと思います。

【プロローグ】

百年と少し前、圧倒的な魔力を持ったモンスターが現れた。モンスターは瞬く間に他のモンスターを従え、魔王と呼ばれるようになった。

竜の翼、狼の牙は人間を震えあがらせた。

彼の元には、互いに争っていた七匹のモンスターが集まった。

モンスターの目的は、モンスターだけの楽園。

世界の人口は著しく減少した。

大好物が人間の、恐るべき捕食動物を倒したのは、一人の勇気ある人間。

誰かが彼をこう呼んだ　勇者と。

勇者は少数の仲間と魔王を倒し、人間の世界に平和が戻った。

今もこの物語は暖炉の前で語られている。

でも、僕は知ってる。

この物語は、勇者が自分の保身の為にでっち上げた物語。

魔王は勇者に倒されたんじゃない。

魔王に忠誠を誓ったはずの七匹のうち一匹が、魔王を裏切り、勇者に売った。

七匹は、それぞれ魔王の意志を引き継いだ。

でも、偽物がいるんだ。

自らの王を売ったモンスターが。

【手紙は尽きない】

残業百時間。

四日と四時間である。

ありえねえ。

ストライキでもしてやろうか。

「おつす、アストー。残業頑張れよー」

そう言ってベッドに入り、ぐーすかと寝息を立て始めたのはカル・ヘッグ。

金の短髪、今は閉じられている青い目。

中肉中背の体には、田舎にいる妹から送られてきたという奇抜なファッションのパジャマを着ている。

カールは憎たらしいくらい幸せそうな顔で寝ている。

危うく顔を踏み潰しそうになった自分をなんとか抑え、机に置かれている山のような手紙に目を通す。

一枚目 とある町の少女さんから
最近肩こりがひどいです。だれかマッサージしてくれる人紹介してください。

知るか。少女のくせに肩こりなんかするな。
丸めてごみ箱に投げ入れた。

二枚目 隣の肉屋から
肉がまずいってクレームが来ました。おいしくする方法を教えてください

ください。

まずい肉屋なんか潰れてしまえ。
また丸めてごみ箱に投げ入れた。

三枚目 夢の世界の住人から

……読んだらきつと目が腐る。
ごみ箱に投げ入れると、入りきらなくて落ちた。
ついに、ごみ箱もごみを拒否し始めたようだ。

僕の所属している国王直轄の組織、デルバルト国民の悩みを解決しよう会。

通称デル会。

このふざけた名前の組織は、国民から寄せられる様々な問題を解決するためだけに発足された会だ。僕はその会長。

部下が動く必要がある問題と、そうでない問題を分けるのが仕事だ。

簡単そうに聞こえるこの仕事、実は百本ダッシュよりも大変な仕事だ。

国民から送られてくる手紙は一日に千通を越え、しかもほとんどがごみ箱行きのくだらない内容。

まともな手紙は一割にも満たない。

しかも、仕事があっても動くのは僕の部下。

僕は毎日手紙とにらめっこ。

「いつそ転職でもするかな……」

僕の脳みそは限界に近づいている。

その疲れ切った脳みそに鞭を打ち、今夜も僕は手紙と格闘するのだ。

【宰相様はたまにいい人】

「生きてるかー？」

カールの声が頭に響く。

僕は昨晚ストレスの爆発するままに未読の手紙は床一面にばらまき、机に突っ伏し、ひとときの休息を味わっていた。

「……もう無理だ。僕は転職する」

「そうはいきません」

カールとは違う低い声に、顔を上げる。

そこには、ちよび髭を生やし、黒い燕尾服を着ている男がいた。この国の宰相様、エレシュ・ハウンドである。

抱えた段ボールの中に入っているのは、目を背けなくなる量の手紙。

「僕は何も見なかった……。黒い悪魔も、白い悪魔も」

だが、宰相様は手紙の入った段ボールで、もとい黒い悪魔は白い悪魔で僕の頭を叩き、天使様の元へ行かせてくれない。

「天使の所に行く時は、あなたの脳みそが腐る時です」

そう言って机の上に大量の手紙を置く姿は、まるで溜まりに溜まった鬱憤を晴らした後のようにすがすがしかった。

「鬼……悪魔……」

「ま、せいぜい頑張ってください」

「……おいこら！ 助手ぐらい付けろよ！！」

「そうそう、面白い話があるんですけど」

僕の話なんてまるで聞こえないという風に、宰相様は別の話を切り出した。

「どうせろくな話じゃないだろ……」

仕事が増えるとか。

仕事が増えるとか。

仕事が増えるとか。

「いえいえ、転職先があるんですけど。それに、給料は今より多くなるはずですよ」

「ほらやつぱり仕事が増え……転職！？」

僕ははじけるように顔を上げ、宰相様を見上げた。

少しハゲ始めた頭が輝いて見えるぜ宰相様！

「転職したいなら、私に着いて来てください」

「イエッサー！」

【上層部は悪魔ばかり】

宰相様の後ろ、ふつかふかの絨毯の上を歩く。

僕は城勤めなのだ。

長年働いているおかげで、城の中で迷う事は無い。

その僕が言うのだから間違いない。

この廊下は王様の私室に続く廊下ではないだろうか。

悪い予感は的中するものだ。

僕が宰相様に案内されたのは、まぎれもなく王様の私室。

「……宰相様、何で僕はこんな場違いの場所に案内されたのでしょうか？」

「陛下があなたに話があると。行つてらっしゃい」

宰相様は悪魔のごとき笑みを浮かべ、僕を王様の私室に押し込んだ。

「ぐえっ」

顔から、これまた頬ずりしたくなるくらいふかふかの絨毯に倒れ込んだ。

コホン、と咳払いする音が聞こえてきて、僕は慌ててその場に跪いた。

「す、すすすいません！ 僕は悪魔 宰相様に騙されて来たんであつて、決して謀反を企てているとかそ言う事ではなく……」

「落ちつきなさいアストー。陛下、アストーを連れてまいりました」

後ろ手に扉を閉めた宰相様が、王様の隣に立った。
王様はだたっ広い部屋の壁際に位置する椅子に腰かけていた。
少し白いものが混じり始めた茶髪に、優しそうなエメラルド色の
瞳。

宝石がたくさんついた服を着ていたが、普通の服を着ていても王
と分かるくらいの気品が滲み出ている。

「アストーか。こちらへ」

「はっ、はい！」

重低音が響き、僕ははっとして王様の前に跪いた。

「そなたは、転職がしたいと申しておったな」

「あ、えと、はい」

何だこの状況。

転職するのに王様の許可が必要なくらい重要な仕事してたっけ？
まさか、国のトップシークレットとか知ってるから、転職する前
に僕を打ち首にしようとしているのか！？

頭の中で必死に考えを巡らしていると、不意に王様が口を開いた。

「……最近、王都近辺のモンスターが活性化しておるのは知ってお
るな？」

「は、はい」

「我々の調査で、モンスターを支配する者がいる事が分かった」

「そ、それは、魔王ですか？」

この世界の人間だれもが知っている、勇者と魔王の物語が現実になろうとしているのか。

「いいや、違う。魔王と言うにはまだ支配圏の規模は小さい。だが、早いうちに芽を摘まねば、いずれは世界を揺るがす存在となるであろう。そこで、勇者を向かわせることにした」

「その勇者と言うのは……」

宰相様、あなたの言う転職先つてもしかして勇者ですか？

「フェウス・エウリディク。シアスに住む青年だ」

王様の言葉に、僕は胸をなでおろした。

貧乏くじは僕の代わりにフェウス君が引いてくれたようだ。安心したのも束の間、しかし、と王様は言葉を続けた。

「物語のような力は持っていない。ただ剣の腕が良いというだけだ」

あれ？

変な言葉が聞こえたな。

確か、勇者は魔法もお手の物だったはず。

「そこで、デルバルト随一の魔法の腕を持つそなたを、勇者の仲間として加えたいのだ」

「……拒否権発動」

「残業、二百時間」

王様の口から発せられたのは、凍てつく氷よりも無慈悲な言葉。
悪魔だ。

「分かりました。魔王もどきを倒してくればいいんですね……」

ははっ、お先真っ暗だよ。

「では、詳しい話はエレシュ、頼むぞ」

「御意」

僕は宰相様に首根っこを掴まれて、部屋の外に連れていかれた。

「宰相様、僕って前世に何か悪いことしたのか……？」

そうでもなければ、こんなにはずれくじばかり引くはずない。
宰相様は微笑みを浮かべて、僕を見下ろした。

「極悪人だったんじゃないですか？」

「あはは……」

僕は宰相様に引きずられ、手紙でいっぱいになっている部屋に戻った。

【さらば残業】

宰相様は扉を蹴り開け、僕を中に放り投げた。

空中で弧を描き、飛びこんだ先は二段ベッドの上。

こ、これはっ、寝ても良いという事か！？

「幸せだ……」

しばらく使ってなかったベッドは柔らかく、枕に顔をうずめると、夢の国にまつしぐら……かと思いきや、僕は宰相様に無理やりベッドから引き離された。

「話があります」

じゃあなぜベッドに投げたんだ！

宰相様に怨みを込めた眼差しを送ると、宰相様は眩しい笑顔を浮かべて、

「寝る寸前の人を起こすのは楽しいですから」

とおっしゃいました。

このサディストめ。

手紙の山に埋まってミイラにでもなっとけこの野郎。

「さて、詳しい話をしましょうか」

僕の怨みは軽く無視され、宰相様は部屋の真ん中の丸いテーブルの前に座った。

僕も渋々座ると、宰相様はおもむろに口を開いた。

「勇者は訓練所にいます。で、あなたに迎えに行ってもらって、魔王もどきを退治してもらいます」

随分軽いな、おい。

「先程陛下が話した通り、勇者に剣の腕前はあっても、魔法の才能はありません。そこで、アストー。あなたが影で魔法を使って、勇者が魔法を使っているように見せなさい」

「なぜそんな面倒くさい事を……」

「民衆が望んでいるのですよ。魔法使いや騎士が行くよりも、勇者が行く方が安心感があると思いませんか？」

「そりゃそうだが……。勇者はその事を知っているのか？」

「知りませんよ。今の時点で知っているのは、あなた、私、それと陛下だけです」

「何だそれ……」

せめて教えとけよ。

当事者なんだからさ。

「ま、報酬はこのくらいで」

宰相様に取り出した書類に書いてあった金額は、目玉が飛び出そうなくらいゼロの数が多かった。

この金額なら、一生遊んで暮らせる。

「じゃ、早速行ってください」

宰相様は僕から書類を取り上げ、部屋から去っていった。

僕は急いでかばんに荷物を詰め始めた。

これで、やっと、残業地獄からおさらば出来るのだーっ！

【さらば残業】（後書き）

感想求む

【田舎者は目利きが少ない】

訓練場は、城の外にある。

騎士が己の腕を磨くために行く場所で、暑苦しいため僕はそんなに行きたい場所ではなかった。

けれども勇者がいるなら行かなければならない。

見学出来るように作られた観客席から見える訓練場は、たくさんの騎士たちでごった返している。

全員で一人の相手に向かって行っているようだ。

その騒ぎの中心は、もちろん勇者。

身の丈ほどの長い剣を振ると、数人の騎士たちが吹っ飛んでいく。宰相様の言う通り、剣の腕は確かなようだ。

僕は観客席から降り、訓練場に行った。

けれど、騎士たちが邪魔で勇者の元へ行けそうにない。どうしようか。

いつそ魔法でも喰らわしてやろうかな。

ちょうど寝不足でストレスが爆発しそうだし。

派手に爆発する魔法を使おうと腕を振り上げると、近くにいた騎士が気付いたのか、僕に近づいてきた。

「アストーさん、訓練所に来るなんて珍しいですね」

「ああ、ちょっと用があるんだ。そうだ、お前、勇者連れてこい」

「はい？」

「だから、あの中に飛び込んで勇者を連れて来いって言ってるんだ」

「じよ、冗談ですよね？」

「僕は本気だ。嫌ならお前ごと魔法で吹っ飛ばす」

「承知しました！」

騎士は敬礼のポーズをとって、人の波の中に果敢に挑んでいった。しばらくして、よれよれになった騎士と勇者がやってきた。

勇者は白銀の短髪と青い瞳、田舎町でよく見かける質素な服とは違い、厚手で丈夫な服を着ていた。国からの支給品だな。

鎧を着けていないのが気になるが、よほど腕に自信があるのだろう。

「初めまして、勇者。僕はアストー・ウィーザルシャ。魔法使いだ」

「あ、初めまして。俺は……」

僕は勇者の言葉を遮った。

「名前は聞いている。フェウス・エウリディクだろう？ ほら、早く魔王もどきを退治しに行くぞ」

「お、おう」

僕たちはいまだ喧騒が止まない訓練所を後にし、王都に出た。

王都は眩しい太陽の光が降り注ぎ、各地からやってくる商人たちでにぎわっていた。

果物の甘いにおいやスパイスの香りが漂い、旅の楽団が奏でる陽気な音楽が流れていた。

いつもなら有給をとって遊びに来るはずだったのに、まさか魔王もどき退治とは。

人生何が起こるか分からないものである。

「勇者、準備は整っているな？」

返事がない。

後ろを振り返ったが、そこに勇者の姿は無い。

早速迷子になったのか！？

辺りを見廻すと、むさ苦しいおじさん方とお兄さん方に囲まれている勇者がいた。

「……おい、勇者」

なぜ外に出て数秒で囲まれているんだ。

しかも男に。

「おっ、アストー。これ綺麗じゃないか？」

勇者が差し出したのは、ただのガラス玉。
表面には小さい傷が付いている。

「これがどうかしたのか？」

「珍しい宝石だってさ」

……驚きを通り越して呆れた。

勇者の故郷、シトラは田舎町だが、まさかここまで物を見る目が無いなんて。

田舎者の中の田舎者だ。

だからこそ、王様と宰相様の口車にまんまと乗せられたんだろうけど。

「……お互い、苦勞するな」

「苦勞？」

「いや、何でも無い。それより、それは宝石じゃなくてただのガラス玉だ。間違っても買っなよ」

「えっ？ ガラス玉？」

「そうだ。早く王都から出るぞ」

いちいち騙されていては日が暮れてしまう。

僕が歩き出すと、勇者は慌てた様子でついてきた。

先が思いやられる。

途中何回か囲まれながら、城門にたどり着いた。

そこには、城壁を背にして立つカールの姿があった。

カールは僕を見ると、近づいてきた。

「よっ。これからよろしくな」

「これから？」

僕は小首を傾げた。

「ん？ 聞いてないのか？ 俺とお前と勇者が、今回の魔王もどき討伐チームだ」

「ほ、本当か！？」

「ああ。お前一人じゃ大変だろって、宰相様がな」

あのサディストの宰相様が！？

僕は信じられない思いで、城を振り返った。

お先真つ暗の旅路に、一筋の光明がさしました宰相様！

「それじゃ、よろしくな、勇者様。俺はカール・ヘッグ」

「よろしく。俺はフェウス・エウリディク」

「じゃ、自己紹介も済んだ事だし、行くぜ！」

黄金色の報酬の為に！

アストー・ウィーザルシャ、頑張ります！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9214z/>

黒翼の魔法使い

2011年12月31日15時59分発行